
卒業

恋に恋シテル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卒業

【Nコード】

N4582H

【作者名】

恋に恋シテル

【あらすじ】

青春が舞台ですっ！呼んだ後感動したなと、思ってくれたらとても光栄です。

前編

六年生 一学期

「ハア……………」
「うちらも、とうとう
六年だねー」

「だるそうに、
未夢^{みゆ}が言う。
でも、そんな事…
どうでも、良かった。
そんな私の気持ちに
気付いたのか

「ちよつとお。
まだ、田澤^{たさわ}
の事、気になつて
るのお？」

「うん…。でも、もあ
いないんだよね。」

私には、田澤が
この学校から、卒業
した事がまだ

信じられなかった。

田澤——。

私が、五年生……つまり
一年前の時三年生と
五年生のクラス替えが
始まった。

私は、四年生の頃
あまり、友達と行動
するのが、好きでは
なかった。
だから、友達も
あまりいなかった。

……だから、
五年生のクラス替え
の時は、友達
出来るかな　とか
ちゃんと、クラスに
馴染めるのかな　とか
色々心配だった。

そして、クラス表を

見ると私は、
五年二組だった。
私は、これで五年間
二組になったといえる。

そして、先生の
指示通り教室へと
向かった。

緊張と興奮で
胸が高鳴る中三階まで
続く階段を登る。

そして、教室に着く。
『ガラス』とドアを
開ける。
そこには、新しい
教室の中だった。
賑わっている。
そして、黒板に
目をやると、席順が
書いてあった。

私は……真ん中の
列の…真ん中の席
だった。隣は……
げっ。羽鳥^{はとり}
だった。最悪。
羽鳥は男子の中で
一番、嫌われている。
理由は簡単。
キモい、すぐキレる
などの理由。

「よろしく、内藤さん」

キモいから、
話し掛けないで。
私は、聞こえない
振りをして席に着く。
すると、先生が
入って来た。

「みんなあ。
席に着いてー」

背、小さっ！
私と、同じ位。
ちなみに、私の背は
高い方。先生は
みんなの用意が
できるまで待ち、
みんなの用意が出来た

所で話し始めた。

「今日から、この
五年二組の担任を
務める、

長野 ながのしほ 志穂

です！よろしく
お願いします。」

みんなは、一応
例をした。
ぎこちないけど。

「えー、今日は
クラス替えだけなので
もう帰ります。
では、みなさん
立ちましょう。」

みんなは、
ガタガタ と椅子の
音をたてて立ち上がる。

「えー、明日も
元気で会いましょう…」

と、先生が言った所で

「ええっ！

明日も学校、
あるんですかあ?!」

と、男子の一人が
言い出した。

神山 かみやまなおや 尚哉……………。

絶対、ムードメーカーに
なりそう。

「当たり前です！

ちゃんと、

来ましようね。」

先生は、笑顔で
言った。その笑顔は
どこか怖いようにも
見えた。

「では、さようなら」

『さよなら』

みんなは、
どンドン帰って行く。
私も、帰る事にした。

廊下を歩いてると、
『トントン』と肩を
誰かに、叩かれた。

「……………??」

振り返ると…

同じクラスの……………

森下 未夢もりしたみゆが立っていた。

「一緒に帰ろっ?」

突然で、びっくりした。
でも、この時から
未夢と仲良くなった。

「う、うん」

「あっ、私

森下 未夢って
言うんだ!よろしく」

「知ってる」

未夢は私の、言葉に
びっくりしたのか

「えっ?」

「教室、入った時に
優しそうな子だなんて
思った。で、名前
見たから。」

「そうなんだあ」

「私は、内藤……………」

「知ってるう」

「…??」

私は、びっくりした。

「よろしくね！

ゆり
友里…！」

未夢も、私の名前
知ってたんだ。

「よろしく！

未夢！」

私達は、他愛もない
話をしながら
廊下をゆっくり歩いた。
すると、

「お前、ふざけんじゃ
ねえよっ！」

誰かが、大きな声で
笑いながら言った。
近くの子はみんな
そこに、視線を
やっている。

「あー、あれっ！
六年の…あっそうだ！
田澤…《たざわ》…
知哉とちやって
言うんだよねー」

私は、未夢が
指差す方に目をやる。

「……カッコいい」

その時、私は
田澤に一目惚れした。

「ええっ！どこが
カッコいいのお!？」

「ちよっ！
声、大きいっ！」

田澤に視線をやると

こつちを見ていた。

「何ター、
神山がカツコいいの？
良かったなあ！
神山あ！」

「バカじゃないのー？
そんな奴じゃないっ」

私は、そっぽを
向いた。

「おー、振られたな」

その時に、
私と、田澤はよく
廊下で会ったりすると
よく、言い合うようにな
った。それが
たまらなく
嬉しかった。

――
――

――
――
――
――
――

「……り！……ゆり！
……友里！」

私の、脳は
未夢の言葉で現実に
引き戻された。

「……！ごめん。
何！？」

「ちよつとお。
何！？ じゃ、
ないよお。ずうーつと
ポーってしてた！」

「……ごめん。
でも、まだ
信じらない。
あいつが、いたのが

当たり前だと
思ってたから……」

私は、涙目になりながらも、未夢に気持ちを伝えた。

「こーらっ！
泣くなあ！上見て、上」

私は、涙を必死で堪えて空を見た。

「また、新しい恋が待ってるよお！
ね、頑張ろっ」

「……うん………！」

「みんなあ、
始業式始まるから
体育館行ってえ」

先生の声と、共にみんな、体育館へと向かう。

「うちらも、
行こっかー。」

私と、未夢を
それと言った会話も
せずに体育館へと
向かう。

体育館には、ほぼ
全校生徒が
集まっていた。

私と未夢は
縦に並んでる通りに
並んだ。

みんなが、集まって
ようやく校長先生の
話が、始まった。

「えー、みなさん
進級おめでとう。」

あなた達は……………——」

校長先生の話しは

長いんだよなあ…………

そんな事を思っていると

『トントントン』

後ろの人に肩を

叩かれた。

「……………何？」

振り返ると、
神山だった。

「内藤さん、右腕に
血流れてるっ」

私は、神山の
指差す所を見る。
すると、血は

右手の手首までに
流れていた。

「うわっほんとだ。
ありがとう。」

私は、ポケットから
ティッシュを
取り出して血を拭いた。
でも、いつから？
さっき、体育館前で
始業式が始まるのを
待ってた時かな？
……でも、どこに
ぶつかっただって訳でも
ないしなあ……。
まあ、いつか。
私は、そのまま
校長先生の長ああい
話を聞いた。

「あぁっ。やっと

終わったつ。始業式
とかめんどいよね」

未夢は伸びを
しながら愚痴る。

「ねえ、…未夢……」

私は、先に行く未夢の
名前を呼んだ。

「何い？」

少し、戸惑ったけど

「明日さ……」

中平中>なかひらちゅうく

の運動会……

なんだって。

…だからさ……」

「見に行くんでしょ？」

私は、未夢に

先に答えを言われて
びっくりした。

「えっ？」

「だあかあらあ

見に行くんでしょ？
ついでに……
田澤も……」

そう……。

中平中には田澤が
いる中学校だ。

明日は、田澤の
中学校の運動会

だから、見に行けば
田澤と会える……。

そんな事を考えてた。

「ねえっ」

私が未夢に

近づこうと思い

速歩きをしてると

声を、掛けられた。

「……何……？」

ビビりながらも、

振り向く。

「何だあ……」

美李^{みり}達か」

そこには、美李
達がいた。

「どおしたの？
そんなにビビって
誰だと、思った？」

「…田澤だと
思った……………」

私が、そう言つと
一瞬…イヤっ…………
二秒ぐらい、
美季達が黙つた。
でも、また
話し始めた。

「ちよつとおっ！
田澤は、もう
ここから、”卒業”
したんじゃないっ
いるわけないって」

あっ……………
そっかあ……………。
私、こんな時まで
あいつを思い出す
何て…忘れよう

「そ、そおだよっ
いるわけないか！」

笑って、誤魔化した。
でも、辛かった。
笑顔だけであいつを
忘れる 何て…
出来るわけない。

私は、教室に
帰る途中頭を軽く
叩きながら
田澤を………
忘れようとした。

『ガラッ』
教室に入ると、
真っ先に未夢が
飛び寄って来た。

「どうしたのっ？」
目を丸くして
聞くと…

「落ち着いて、
聞いてね…。
実は……………今…
美李達の会話を
盗み聞きしちゃった
んだけど…………
美李がね…………
田澤の事を…………
好きなんだって！」

えっ？
マチで……………？？
そんな事を
思っていると

「友里いつ」
後ろから、
美李に抱きつかれた。

「うっあっ」
変な声が出た。

「ハハっ
変な声え……………！」

「だって
おどかさからあ……………」

すると、美李は
急に私の手首を
掴んで

「……友里ちよつと
きてえっ！」

私は強引に
引っ張られるがままに
着いていく。

着いた場所は……
『二階の廊下』……
だった。

「……っはあ……
……はあっ……
……どうしたのっハア……
急に……っ」

そっいいながら

息を調える。

「友里はさあ……
今、好きな奴とか
いたりする？」

突然何なんだ？
とか思いながらも
ためらいがちに
答える。

「私は……その人の
事を忘れよう って
思ってるんだ。
でも、忘れられない
んだよね……」

「田澤？」

……！！！！
どうして？何で
知ってるの？
そんな、私の心を
よんだのか

「私もさ……」

田澤の事が
好きなんだ……。

田澤がまだこの
学校を卒業してない

時に田澤がよく
うちのクラス
覗きに来てさそんで
キモいとか
しょっちゅう……
いや…毎日喧嘩
したりしたんだ…」

何か、美李の
言ってる事が全部
自慢に聞こえてきて
ムカついてきた。
でも、ここは
グツと我慢した。

「でもそんなある日
うちが、田澤に
”もし、一回でも
キモいって言ったら
言った方の好きな人
を言おう”って
賭けをしたんだ。
私、そんなときに
わざと、キモいって
言って告白しよう
って決めたの。
…でも、………
先に言われたんだ。
で、約束は約束
だから田澤に

好きな人聞いたら
……っ……」

……？泣いてる？

私は、美李の方に
顔を向けた。

すると、美李は
泣いていた。

「美李？」

「……っぐすっ……」

ごめん。続き話すね。

私、その時田澤に

好きな人聞いた時

きっぱり……

諦めたんだ。」

………そっか。

田澤の好きな人、

美李じゃないんだ。

可哀想だと、

思ってるのに

どこかで、喜んでる

自分がいるのが

恥ずかしい。

じゃあ、田澤の

好きな人は

誰なんだろう。

「ねえ、美李…
田澤の好きな人って
誰なの？」

私は、聞いてみた。

「友里はさあ、
明日の中平中の
運動会、見に行く？」

いきなり、
話をそらされた。
と思いながらも
答えた。

「中平中の
運動会は、未夢と
行くよ。」

「そっか…
じゃあ明日の運動会
で田澤の好きな奴が
分かるよ。」

そう、言って
美李は教室に戻った。
私も、教室に戻った。

教室に戻ると

「おー、やっと来た。
内藤、引いて」

そう、言つて
クラスの宮元^{みやもと}、ムードメーカーで
面白くて運動神経が
いいやつだ。
私は箱に入った
クジを一本引いた。
すると、先に
赤の印が塗つてある。

「おっ！内藤が
当たつたぜえ！！」

宮元はそう叫んでる。
………ハッ？

「実はさ、今から
席替えすんの。
先生が来る前に。」

んで、クジを引いて
黒板に書いてある
数字を見てその
席に座るの。
でも、先っぽに
赤い印がついてる
奴は、今日の
放課後この教室の
全体掃除 って
わけっ！
一石二鳥じゃね!？」

…どこが
一石二鳥なのか
さっぱり
分かんないんだけど。

「私、一人だけ!？」
「違あう！
神山もっっ!！」

私は、ふうんと
頷いて黒板とクジの
先に書いてある
数字を、見合わせる。
私は……………
一番後ろの、一番
窓側かあ……………。
とりあえず、椅子と

机をそこに
持ってくる。
椅子に腰を掛けて
隣を見ると

「あんたが、
隣いつ……………!？」

「それ、こっちの
セリフだよっ！
バーかつ」

そう。神山だった。

「ばかにバカって
言われたくないしっ」

私達がそんな
言い合いをしてると

「二人とも…
まあまあ……………」

そうやってきたのが
未夢だった。

「未夢、私の
目の前だったの!？」

「うんっ

よろしくう」

未夢の隣は………
宮元だった。

「いいなあ。
まだ、宮元の方が
マシだったあ」

私は、神山に
目をやり嫌みを
言った。

「おいおい。
『マシ』って何だよ、
マシって。」

「マシはマシなのっ」

「だから、その
言い方が意味
分かんねんだよ」

「もお、ストップ！」

未夢が間に入る。

「もおっ!!!
ケンカしすぎっ」

未夢は呆れた
ように神山、宮元
私に言っている。

『すいません』

私達は、
声が揃った。
すると

『ガラッ』つと
いう音と共に先生が
戻って来た。

先生が戻ってきても
みんなは、まだ
騒がしい。

「しいずかあにつ！」

先生の声が
教室に響いてみんなの
声は、徐々に
少なくなり
完全に声が
聞こえなくなると
先生が話し始めた。

「みんなは、もう
六年生なんだよつ。
学校の一番上が
そんなんで
どうすんの……」

先生の話
を聞いてい
ると横から
紙が、きた。
その紙を開くと

『先生一々
うるさくねっ？』

とだけ、書いてある。
神山の方を見ると
神山は笑っている。

『少し
分かるかも』

そう書いて紙を
折り、渡した。
それからは、
紙は、こなかった。

「中休み」

「あーっ、

中休みだあっ！」

未夢は、後ろにいる私の方を振り向き伸びをしている。

「だねえー」

私は、窓を見ながら、適当に答える。

「ねえ、

どっか行こー」

未夢は、

私の手首を掴んで教室を出る。

今は、夏で

凄く暑い。教室の

中はクーラーが

きいていてあまり

暑さを感じなかった
けど、廊下に出ると、ムワッと
蒸し暑い風が
全体に染み渡る。

「あっちー」

私は、手で
顔をあおぐ。
そうすると、少しは
涼しいかな…とは
思ったけど
暑い!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
大体、4月って
こんな、暑いのか?!
とか思う。

「校庭行こっか」

未夢にそう言われ
私達は校庭に
向かうため、階段
を降りた。
みんな、校庭に
向かうのか
一段抜かしをしてる
子や、話しながら

降りてる子で
賑わっている。
私達も、その中の
一つ。

「あっ！」

急に未夢が
何かを思い出した
ような、声を
出した。

「もおっ！
びっくりしたあ」

「ごめんごめん。
つてか、聞いてっ！
うち、好きな人
出来たんだーっ」

その言葉に足が止まり

「マチツ？！
誰だあっ！教えてっ」

興味津々な
私に、未夢は耳打ちで

『…宮元……』

と呟いた。
思わず えっ という
声が出た。

「本当につ？」

「…うん……………」

未夢は照れてる。

「そっかあっ！

じゃあ、席隣じゃん！
良かったねー」

未夢を冷やかす。

「止めてっ

そんな事言わないで！
変に意識しちゃう」

「アハハっ！

それ、言いすぎっ」

そんな風に

笑いあつてると

「なー、内藤。」

後ろから声が

したので振り向くと
宮元だった。

横にいる、未夢を
見ると平然としてる。

私は、そんな

未夢に肩で肩を

つついた。

すると、未夢は

頬を赤らめた。

まあ、それは

いいとして

「何？

どうしたの？」

「今日の放課後、

西昇降口なつ。

んじゃっ以上っ！」

「以上かいつ

私は、最後に
つつこんだ。

「何、するの？」

「分かんない…。

あれえ？もしかして

気になってんのぉ？」

「べ、別につ」

もお、素直じゃないんだからーっ。とか、心の中で未夢を冷やかした。

「でもさあ、宮元の好きな人っているのかなあ…。」

やっぱり。未夢、気になるんじゃない。

「いるっしょ。もお、六年だし」

「そおかなー。…あーっ！メアド欲しいっ！」

私は、未夢のその言葉に驚いた。

「宮元って、携帯持ってんの！？」

「そっだよー」。

学校に持つてきて
るもん。あつ！
あと、神山も」

「マチツ？あの
二人が並ぶと
”不良”って感じが
するよねー。」

私が、そう言うと

「だよねっだよねっ！
もー、二人とも
かっこいいけど
宮元だよねえ！……！！！！
かっこいい……」

だめだ。
別の世界に迷い
こんじゃったよ……。

『 』

「あーっ！
中休み………
終わっちゃったあ」

「話し、しすぎたね。
でも、これは

これで楽しかった
よねっ
」

「まあねえ。
教室もどるかあ
」

私達は、渋谷
教室に戻った。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

長い六時間が
やっと終わった。

「友里、帰ろっ」

「うん。いい……」

私は、そこで
思い出した。
宮元との約束を。

「ごめん。」

今日宮元が
西昇降口に来て
言ってたじゃん？
だから…先に
帰ってて。」

「うん…わかった」

未夢…かわいそう。
本当はすごく
気になるよね…。
でも、ごめんね。
私は西昇降口へと
向かった。

「よお、来たか」

西昇降口に行くと
すでに、宮元は
着いていた。

「でさあー、
どうしたの？
急に」

「…いやあ、
ちよつと聞きたい
事があつてね」

もお、そんな事
教室で聞けば
いいじゃんっ！……！

「何を？」

「あのさあ………」

「あのさあ？」

少し、沈黙が
続いたが

「お前って……
神山の事好き？」

……???

はっ?!

「何、急に……」

「いやっ……あいつが
お前の事を

好きだって言うから

……いやっ!

何でもない。」

宮元はそう

言って走って

逃げようとしたが

それを、私は止めた。

「ちよつと

待ってええっ」

声を振り絞り

叫んだ。

すると、宮元は

ピタリと止まり

振り返った。

私は、宮元に

近づきながら

「今の、
どういっしょとっ?」

「だからあ
……
何でもない」

「何でもなくないっ
教えて」

「いっしょ、
言いにいっ……」

「……?」
誰もいないけど?」

「……っあー!
もうっ!
何でもっ!」
いっしょ
言えない……」

「そこまで、
言われるとさすがに
困り考える。
明日まで
待てないしい……
かといっつて
電話は……!」
あっ!メールっ!

「いっしょ、あ、」

メールはっ？」

宮元はハツと
したように
ランドセルから
白い小さな紙を
出した。

「じゃあ、ここに
お前のメアド
かいてっ」

宮元から、
ボールペンと
白い小さな紙を
渡され、それを
受け取って
自分のメアドをかいた。

「んじゃ、
夜メールするわっ」

そう言って
ランドセルを背負い
廊下を走って
帰って行った。

「ただいまあゝ」

家に、帰って

携帯を開く。

いつも、家に帰ると

携帯を開く癖が

ある。それと同時に

宮元の事を

思い出した。

でも、メールは

来ていなかった。

まだ、夕方だし、

当たり前か。

部屋で適当に
時間を潰してると

「友里ー、
ご飯できたから
出てきなさい」

ドア越しに
お母さんの声が
聞こえた。

リビングに
行くと美味しそう
な匂いが
漂っている。
席に着き

「いただきますあす」

と言つて
食べ始める。
お姉ちゃんは
もう、一人で
食べ始めてる。

早く食べて
この場所から
逃げ出したい。
そんな事を思った。
場の空気が悪い。

最近家は
全体の空気が悪い。
その理由は
わからない。
けど、何かが変。

「じいちゃん」
咳くように言つて
自分の部屋へと
戻つた。

「ハア……………」

自分の部屋に
戻るとつい大きな
ため息が出た。
家に、いるだけで
疲れる。
ふと、宮元の
言葉を思い出した。

携帯を開くと
新着メールが
一件入っていた。
みると、
宮元だった。

『さっきの
続きだけどさ、
神山、お前の事
好きなんだって』

メールを
読み終わると

息が詰まりそうになつた。

……あいつが？
私のことを？
よく、分かんない。

とりあえず
返事を返した。

『そうなの?!
知らなかった。
でも、何で宮元が
あんな、事を
聞いたの?』

そう、ただ一つ。
なぜ、宮元が私に
神山を好きなのか
聞いて来たのが
疑問だった。
頼まれたとか？

『
~
~
』

メールが来た。
返事、早いな。
男がメールの
返事を返すのが
早いつて……………

少し、キモい。

『さあ？』

よく、わからない
けど聞きたく

なっただけ？……

みたいな…（笑）』

いやっ、

それじゃ困る

んですけどっ！

そう、思いながら
も返事を返す。

『ふうん。

わかった。

あとさ、宮元の

メアド未夢に

教えていいかな？』

私だけが

宮元のメアドを

知つてると

聞いたら多分…

イヤッ絶対に

シヨックを受ける

と思ったから。

『 』

『むりっ！』

俺、あいつ苦手
だから（汗）』

ズキッ

びっくりした。

あいつが未夢
の事を嫌い
だったなんて。

『わかった…』

でもさ、私の
メアド知ってるとか
言わないでね？』

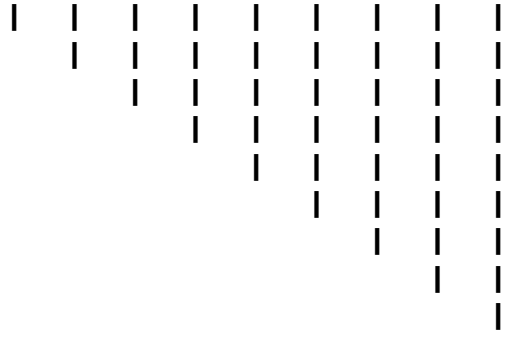
未夢には、悪い
と思ってるけど
送信した。

『 』

『分かってるっ
じゃっ、また
明日な』

そうして、そこで

メールは終わった。



朝は苦手だ。

「あつ、友里
おはようっ」

教室に入ると
一番に未夢は私に
挨拶を交わした。

「おはよう……」

「どうしたの？」

私は、自分の
席に着きながら

「眠い………」

と一言。

「そっか……。
頑張れ」

未夢はそう
言っで私の目の前に
ある自分の席に
着いた。

「まぢでっ？
うけるんだけどっ！

まだ、うけるっ！
アハハハハっ！」

教科書を
整理してると大きな
何人かの男子の声が
聞こえた。

みると……………

思わず ドキッと
してしまった。

……………そう、神山。

横には、

宮元もいる。

宮元と神山は
重そうな

ランドセルを机に
置いて、中から
教科書を出してる。

何だか、変に
意識する。

それに、この
心臓のドキドキは
何なんだろう。

平然な態度を
とるけど……………

「内藤。」

「何っ!?!」

急に名前を呼ばれ
変な声が出た。

「何だ、その声」

「うるさいっ

何でもない!
ってか、何?」

やばいっ

むきになると
怪しまれるかな…

「……やっぱ
いいや。」

「何でもない。」

神山は下を
向き断った。

でも、何で悲しい
顔をしてるのか
気になったけど

「じゃあ

呼ばないでよっ」

と言いつつ。

前を見ると

宮元と未夢の

座ってる席に微妙な

距離が出来てる。

っていうか、

宮元が離れてる。

……ああ、

そっか。未夢の

事嫌い何だっけ。

かわいそうだな。

一・二時間の

理解が終わって

中休み。

「ねえ、

友里…ちょっと来てくれる?」

未夢にそう言われ廊下に出た。

「どうしたの?」

未夢は黙り

込んでいる。

でも、五秒位して話し始めた。

「どうしよっ…
…っ!」

未夢の目からは次々に涙が流れる。

「ちよっどっ

どうしたの?!」

思わず取り乱す。

「宮元がっ…
宮元…がっ」

私は、黙って聞いていた。

まだ泣いてるけど
少し落ち着きを
取り戻した未夢は
少しずつ
話し始めた。

「宮元がね…っう
今日、…誰かに…
…っくっ…
誰かに…告白…
っうっ…
するんだってっ」

その場で
泣き崩れる未夢
掛ける言葉を
失った。
宮元が？告白…？
驚きで私は
固まった。

「だ、大丈夫だよっ
告白する相手…
未夢かも…
しれないじゃんっ」

嘘……………。
あいつが、未夢の
事…嫌いなのに。
でも、これが
未夢に掛ける
言葉で精一杯……
だった…。

中休み、未夢は
ずっと泣いた。
そのおかげか
未夢は元のように
元気を取り戻した。

三時間目の
算数はドリルを

ひたすら、
進める事だった。
みんな、話を
しながら
進めたり中には
全くやってない
人もいた。
でも、先生は
すごく大事な仕事
をやってるのか
生徒なんか
注意する余裕も
なさそうだ。
私は、隣の神山と
喋りながら
進めている。

「何これっ！
全然分かんない
んだけどっ」

私が、一人言を
言うと神山は

「はっ？お前
バカ？こんな問題
四年でも
解けるっつーの」

と言いながらも
教えてくれた。

「すみませんねっ
どーせ、バカ
ですよっ」

そう言い返した。

ふと、前を見ると
宮元と未夢は
一言も喋らず
黙々とドリルを
進めていた。
…なんか
見てらんないな。

「……………そんで
この四はここに
移動すんの……………
…っつて、お前
聞いてた?…」

神山の声で
ハツとする。

「…へッ?!
ごめんっ…………。
聞いてなかった。」

私は、笑って
誤魔化した。

「…つち。
だあかあらあつ……………」

……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………

四時間目の

国語も終わり

給食だ。

給食の時間は

私、未夢宮元神山

で机をくつつける

事にした。

給食当番の人達は

みんなの給食を

よそい、

日直は机を

くつつけた

グループの態度が

いい所から

呼んでいき

給食をもらいに

いける。

私と宮元は

姿勢を正して

座っていた。

「じゃあ、

そのグループ

行っていいよ」

私達のグループが
呼ばれた。
宮元と私は
給食をもらいに
行く。

給食をもらい、
席に着くと
宮元に呼ばれた。

「なあ……」
内藤……。「」

「何？」

「……いや。
やっぱりいや」

宮元は
途中で話すのを
止めてしまった。
でも、私は
はい、そうですか
と引き下がらない。

「ちよつとお、
途中まで
言ったんだから
最後まで
言つてっ！」

「…じゃあ
廊下で。」

私と宮元は
教室を出て
廊下に行った。

「で、何？」

宮元は照れながら
口を開いた。

「俺さ……………」

――
――

「えっ？
今、何て…………？」

私が、宮元の
言葉を理解
出来ずにもう一度
聞こうとしたが

「友里ー、
ちょっと
手伝ってくんない」

友達の美季に
呼ばれてしまった。

私は、啞然と
しながら
美季の方へ
向かった。

「そこに
置いてある手紙
全員配つて。」

美季からの
お願いは
プリント配り
だった。

私は、プリントを
配りながら

さっきの
宮元の言葉を
頭の中で何回も
繰り返した。

『俺さ………
内藤の事が……
好きだから。』

あり得ないっ！
どうしよっ
今日、宮元が
告白する相手が
私だった何て！
未夢には………
言わない方が
いいよね。

プリントを
見ると
『宮元 遊大』
の名前が書いて
あった。
宮元に………
配らなきゃ。

足を、宮元に
近づける。

そして、宮元に
そのプリントを
渡した。

「…さ、サンキュ」

宮元にお礼を
言われるとは
思わなかった。
とっさに出た
言葉が、

「…うん……」

その、一言だった。

「さっきの
話し……俺
本気だから。」

「…うん。

少し……考え……

させて……」

私は、そう
言い残して
その場を去った。

悩む事じゃ
ないのに……。
どうして…
どうして直ぐに
断れないだろ。
最後の一枚の
プリントを
配り終えて
みんなで、給食を
食べ始める。

何か……
気まずい。
そんな空気を
消したのが

「あれっ？
何か……
しらけてねっ？
ちょー静か……」

「……だよね……」

神山と未夢は
同感していた。

「ねえ、友里

何か凄い静か……。

いつもは、

神山と口喧嘩

してるのに」

未夢は私の

顔を伺いながら

そう言った。

「そうだよーっ

いつものゴジラ

みたいな、内藤

がどうかしてる」

神山の言葉に

カチンっ ときた。

「はあ？

意味分かんないし

誰が、ゴジラよ」

「誰が、ゴジラよ

っってお前だしっ」

「ゴジラに

ゴジラって
言われたくない
しい〜」

「ゴジラに
近いのはお前だろ」

「自分の
顔を鏡で見てから
言ってくんない？」

「人のこと言えね……」

「二人とも……
ストップっ！」

いつものように
口喧嘩をしてると
未夢が止めに
入る。

「元に戻った
けどさあー……
戻りすぎっ」

「本当だよっ」

未夢は

宮元に同感

してもらい嬉しい

のか照れている。

昼休み、
事件は起きた。

「ねえ、友里…」

給食の後片付けを
していると
後ろから名前を
呼ばれた。
振り返ると
女子軍団っ！

「…な、なにっ！？」

「ちよつと来て。」

先頭の美季に

腕を引かれ

廊下へ。

廊下を歩いてる

みんなは

立ち止まり

私達に視線を

向けている。

「友里さ……………」

宮元に……………」

告られたのっ!?!」

……………」

何でえ!?!

「こゝ、告られた。」

嘘つくと

面倒になるので

最初に白状する。

「ええええっ!」

「どうなったの!?!」

「返事はっ?!」

「そんでっ?!?!」

やばいつ……………。

「へ、返事は…
保留…です……………」

「はあっ?!
保留つつっ?!」

「う、うん」

つてか、
廊下を歩いている
通行人は
ざわざわしてきた。

『何ター?
宮元に告られた?』

『マチでー?
あの、宮元に?』

『うん。
返事は”保留”
だつてえ!』

『うつそ!
もったいなあ!』

ちよつとお？
聞こえてますよ。

「もぉ、OK
しちゃんなよぉ」

美李は
目を輝かせてる。

「あのさぁ……
他人事みたいに
言うけど……
こっちだって
色々
あるんだから」

「……………」。
色々って？」

だって……………
未夢が…
可哀想じゃん。
そんな事を
思っていると

「友里ー？」

未夢が教室の
ドアから私を
呼んでいた。

「っ！今、
行くー」

私は、その場を
去るように
未夢の所へと
向かった。

「ど、どうしたの？」

私は、未夢に
バレないよう、
必死で平常心を
保とうとするが
声が、うわずる。

「いやっ、

今日さ学校

終わったあと
中平中の運動会に
行くんでしょ？」

「うんっ！
もちろんっ！」

「じゃあ、
放課後に
中平中の前
集合ねっ」

「わかった」

そう、約束して
未夢は委員会が
あると言って
教室を後にした。

……何だろっ。
この気持ち。

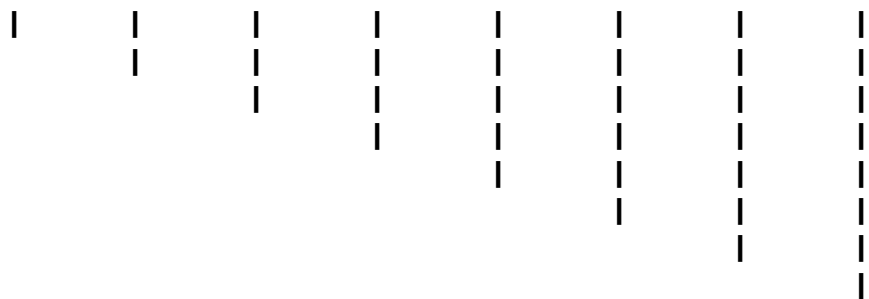
私、田澤のこと
好きなんだよね？

……でも、
さっき宮元に
告白されて……。

気になって
しょうがない。

……まさか、宮元

の事好きじゃ
ないよね？



あれから、
掃除の時間も
五・六時間も
重い気持ちのまま
で、今は
集合場所の
中平中の前に
向かっている。

…！
そういえば、
美李が今日の
中平中の運動会で
田澤の好きな
人が分かるって
言ってたよね？
ヤバイッ。
ドキドキ
してきた。

そんなこんなで
中平中の前に
着く。未夢は
まだ来てない。
突っ立って
待っていると

「内藤?…」

聞き慣れた
声が聞こえた…。
振り返る。
私は、右手で
口をおおった。
涙が出そうで…。
そう、田澤。

「お前、
見に来てたんだ?」

やだっ。
いつもの田澤じゃ
ないよ。

「今、学校

終わって見に来た
所なんだよねっ」

私は、笑う。

でも、心は

泣きそう。

悲しい とか

じゃなくて

嬉しくて、

胸が痛い感じ。

涙が出ないよう

私は、必死で

堪えた。

「そっか…。

ありがとう」

ねえ、泣いても

いいかな？

そう、思った

時にはもう

ポタッ ポタッ

と、涙は

流れていた。

「お、おいつ！

どうしたんだよ」

田澤は焦って
私を人目の
つかない所に
連れて行って
くれた。

「…で、
どうしたんだよ？」

「……………っ。」

「どした…？」

優しすぎるよ。
私は、その
優しさに負けて
話した。

「…田澤…
変わったよね。
昔は、廊下で
すれ違えば
言い合ってたさ。
でも、今は
違う。なんか
優しくなった。
それが…何か
悲しい……………」

すると、

私は田澤の
腕の中にすっぽり
とはまった。

「ちよっ!?!」

田澤……!?!」

うそっ。

私……私……!

夢みたいっ!

「俺……」

内藤が好き……

付き合っ……

ください……」

神様……。

ありがとう。

信じらんないよ。

本当に夢みたい!

「よろしく

お願いします……」

私達は、

抱き合った。

すると、

田澤は私から

顔を離して

顔を近づける。

怖い。でも

目は開いてる。

そんな私に

気づいて

「怖いか…？」

「少し…」

「じゃあ、

目つぶってるよ…」

目をつぶる。

そして、

私は初めてキスを
した。

「じゃあ、俺
もう行くな……。」

田澤はそう
言って
立ち上がり

「しっかりと
見てろよっ！」

「うんっ！」

田澤の顔は
木々の間から
太陽の光がもれ
それが田澤の
顔を当たり
輝いていた……。

なんか……
本当に夢みたい。
嬉しい……。
嬉しいよっ！
そんな事を
思っていると

『
〕
』

携帯の着信音が流れた。

「もしもおし」

『あつ。』

友里ー？

『どうだった？』

その声は

まぎれもなく

美季だった。

「えっ？」

『どうだったって？』

『だあかあらあ、』

田澤から告白

されたでしょ？』

……………！

「何で知ってんの？」

『田澤が六年の頃……ほらっ！どっちかがキモいって言ったらその』

言った方の
好きな人を
言わせるって
いう約束したって
話したじゃ？』

「うん」

『で、田澤が
キモいって言って
田澤から
好きな人を
聞いた――
って所で話し
終わったよね？』

「うん」

『できあ、
田澤ったら
”俺、内藤が
好きなんだよね
入学した中学の
運動会でもし
あいつが
来てくれたら
告白しようって
決めてんだ”
なーんて言って
私、その時

泣きそうだった
んだからねっ』

「そうだったんだ。
ごめんね…」

『そんなん、
気にしてない
からねー！
もちろん
付き合う事に
したんでしょ？』

「うん」

『そっか！
じゃあねっ』

そう言つて
美李は電話を
切つた。
その時、
未夢の事を
思い出した。
慌てて未夢の
所に向かった。

「ごめんっ！
未夢っ！」

「あーっ！
友里いつ！どこ
行ってたの？」

「…田澤に
告白されたっ！」

私は、満面の
笑みで報告した。

「マチでえっ！…！」

私は、今
あったことを
全て未夢に

はなした。

「ほんつとおに
良かったねっ！」

「うんっ！
まだで嬉しい！」

「んじゃ、
田澤見
に行きますかっ」

田澤を見に行くと、
ちよつど田澤が
リレーで
走っていた。
しかも、アンカー！

でも3位だ。
やばい！
応援しないと。

「知哉ー！
頑張つてーっ」

すると、知哉は
私に気付き
ブイサインを
した。

私もブイサイン
をしかえした。

すると、みるみる
内に知哉は
抜かしていく。

一人………
………二人……。

やった……。
1位だよっ。
涙が出てきた。

リレーが終わり
知哉は私の方へ
来た。

「お疲れさま！
知哉っ。」

私はいつの間にか
知哉 って
呼ぶようになった。

「おう。
ありがとう。
友里」

知哉の
運動会が終わった。
私は、知哉と
一緒に帰ろうと
思い校門で
待っていた。

「あれっ？

友里待ってて
くれたの？」

「あつ…知哉。
うん。」

「ハハツ。
ありがとう。」

私達、本当に
カップル何だね。
嬉しいよ。

ふと知哉の
手が私の手を
握る。
とても嬉しかった。

「なあ、
俺んち来ない？」

ドキッ。
付き合って
最初から知哉の
家？！でも
行きたかった。

「うん。
行きたい。」

「じゃ、
決まりな！」

何か、知哉――
変わった。
そりゃ、誰だつて
大人になるよね。

――
――
――
――
――
――
――
――

「お邪魔します。」

知哉の家に
入るなり

「あれっ?!
知哉。あなたの
彼女さん？」

お母さんが
出てきた。

「うん。」

「あらあら!
あんたも彼女が
できたのね！」

「こんにちは
私が軽く頭を
下げると

「いいこねー。
こんにちは」

お母さんは
笑って会釈した。

「これが、
知哉の部屋ね！。
何かいいね」

「そうかー？」

知哉の部屋は
男 って感じが
していて好きだ。

「好きに
していいからな」

「そお？じゃ、
お言葉に甘えて」

ポフッ。

私は、知哉の
ベッドに
寝転がる。
気持ちい。

「それは、好きに
しすぎだろっ」

と言いながら
知哉は私の隣に
寝転がる。
何か、ドキドキ
してくる。
次第に部屋は
静かになる。
そして、二度めの
キスをしてくれた。
今度は、知哉
の舌が私の
舌と絡まる。

「ん…ふう……」

慣れないキスに
息が漏れる。
すると、知哉は
私の服のボタンを
外した。
ちよつと！

まだ六年なのに！

「怖い…？」

「うん。」

「そっか…」

そうやって
知哉は手を
止めた。

「やって…」

私は、知哉
の手を掴んでいた。

「俺でいいのか？」

「うん。」

「知哉がいい。」

「わかった。」

知哉は私の
胸にキスをする。

ピチュ ピチャ

「……………っ」

必死で声を

我慢した。

でも、そんな

気持ちを

見抜かれて

「声…我慢しないで
いいからな…」

知哉はそう

言ってくれた。

知哉の舌は

私の体中を

舐める。

気持ちいよ…。

「あっ……………。

とも…やつ…。

あっ…あっ」

初めてした

Hは六年の

私には、早すぎ
だよ。

「怖かったか？」

「ううん…
気持ち良かった」

「そっか…」

ふと、時計を
見る。

「ヤバッ。
もう7時になる。
じゃっ、
帰るねっ！」

私は、荷物を
持って立ち上がる。
すると

「送ってくよ」

「えっ？」

「いいの？」

「お前、」

「怖いだろ？」

「何それ！」

「なんかむかつくう」

「ハハツ」

「冗談だよ」

「じゃっ、行くか」

「お邪魔しました」

「私は、そう」

「一言言つて」

「知哉の家を出た」

「夜の外は」

「夏っていうのに」

寒い。

「大丈夫か？」

知哉は

そう言つて

私の手を

ギュッと

握つてくれた。

「ありがとう」

何か、急に

照れくさくなる。

「なあ、友里……」

ふと、知哉は

私の名前を呼んだ。

「……？何？」

「お前、六年

なのにHして

平気なのか？」

ドキンと

心臓が激しく

脈を打つ。

「な、何？急に」

「いやつ。もし妊娠したら俺の責任だし……」

「そりゃあ……」

怖かったよ。

でもね、知哉

だったから

平気だったの……。

好きだから……」

何言ってるんだろ。

「ありがとう。

でも、もしもな

妊娠したかもって

思ったら直ぐに

俺に言えよ……？

六年で妊娠は

ヤバいからな……？」

「うん……わかった」

私達は、

途中で立ち止まり

抱き合った。

知哉の体は

大きくて

守られてる感じが
して私を
安心させた。
一年で知哉は
すごい変わるんだ。
性格も。体の
大きさも。背も。

「ありがとう」

「おう。
じゃあまた
明日なっ」

「うんっ。
バイバイ！」

私達は別れた。

家に入るなり
お母さんが

「友里っ。
遅いじゃん。」

と怒られた。

「ごめんなさい」

「まあ、いいけど
ご飯出来てるから
早く食べなさい」

私は、靴を
脱いでリビングに
向かった。

リビングには
お父さんと
お姉ちゃんが
ご飯を食べていた。

「いただきます」

つまらない
食卓でご飯を
食べ始める。
何で、こんな
味がしないの？
ただ、箸を
すすめてる
だけじゃん。

「ごちそうさま」

私は、素早く
ご飯を食べて
素早く部屋に
向かった。

部屋に入ると
とても、静かに
なったように
思えてきた。
どうして？
どうしてこんな
家庭になったの？
何が原因？
こんな家……..
嫌だよ。
涙は後から
後から流れる。
声を押し殺して
泣く。
私は、携帯を
手にとり
知哉に電話を
かけた。

「もしもし？」

知哉の声だ。
そう思うと
安心して余計に
涙が出てくる。

「とも……やつ」

「友里？」

「どうしたんだ？」

「家……」

「いたく……ないよ」

「どうした？」

「私は、今までの
家族の事を
知哉に話した。」

「そっか……。
友里、今から
二日間の洋服
用意して
外で待つてて。
直ぐに行くから。
じゃあなっ」

「えっ？」

な、何！？
どうしよつ。
と、とりあえず
二日間の洋服
だよね。
私はあわてて
用意して
バッグに
詰め込んで
お母さん達に
ばれないように
外に出た。

五分もしないで
知哉は来た。

「知哉……………」

「行くぞ」

知哉は私の

手を引き
急ぎ足で
歩く。

私達は、
一言も喋らないで
知哉の家に
着いた。
なぜだろっ。

「入って」

「いいのっ?!」

「うん」

私は、
知哉ん家の
玄関に足を
踏み入れた。

「お邪魔します」

「俺の部屋に
入ってて」

知哉にそう
言われたので
知哉の部屋に
向かう。
どうして
知哉ん家に
来たんだろう。

ガチッ
さっきと同じ
知哉の部屋。
私は正座で

床に座った。

しばらくすると
知哉が来た。

「で、
どうしたんだ？」

知哉は私の隣に
座って聞いた。
私は、知哉に
家族の全てを
話した。

「…ごめんな」
話し終えると
急に知哉が
謝った。

「どうして
知哉が謝るの？」

「ごめんな…。
彼氏なのに
そんな事も

知らないで…」

大丈夫だよっ。

「だって…」

まだ……今日

付き合い

始めたんだよ？

そんな…

知らなくて

当たり前だよ…」

「ありがとう」

知哉は

私を抱きしめてくれた。

「そういえば…」

ねえ、何で急に

二日間の洋服

用意しろ 何て

言ったの？」

「ああ、友里が
家にいたくない
って言うから

俺んち泊めて
やるーかなって
思っつて。丁度
金曜日だろ」

知哉、そこまで
考えてくれて
いたんだ。
ありがとう…。

「じゃっ
お言葉に
甘えて……
泊まらせて
もらいますっ」

「ああ」

凄い幸せだな。
この時が
止まっつてほしい。
そんな事を
思っつてると

『
〜
〜
〜
』

と携帯の着信音。

開くと、

「あちゃー、
お母さんだ。」

私が言うと

「貸して。
俺が出る」

そうやって
知哉は私の携帯を
手にとり出た。
私は、自分の
耳を携帯に
くっつけて
二人の会話を
聞いていた。

「もしもし。
友里の彼氏です」

『……っ！
あなた一体
誰なのっ！？』

「中平中学校
一年三組、

田澤知哉です」

す、凄い。

知哉が優等生に
思えてきた。

『あらっ、

まだ中一なの!?

それなのに

どうして勝手に

友里をそちらへ

連れて行くのっ
』

「お母さん。

友里は今、

悩んでるんです。

何の事でだと

思います?」

『何の事って…っ』

「お母さんと

お父さんの

事でなんです。」

『…っ!?!?』

「最近、家族が

バラバラだと。

お母さん、

あなたはそれを
知っていましたか」

『知らないわ。
そんなこと』

「友里は
悩んで悩んで
悩み続けた。
ご飯食べる
時だって
ただ、箸を
すすめてるだけ
って友里は
言っていました。
お父さんも
お姉ちゃんも
一言も喋らず
ただ、ご飯を
食べるだけ。」

『だから…
なによ……………』

「友里をもっと
わかってあげて
くださいっ。
じゃないと
俺…友里を
かえせません」

『あなたねえ…
田澤くんだけ？
そんな事しても
いいと
思ってるのっ!?!』

「お母さんこそ
子供の気持ち
を分かんなくて
いいんですか？
あとは、友里と
話し合って
くださいっ」

知哉は
そう言って
私に携帯を
手渡した。
それと同時に
妙な緊張感が
空気を
はりつめた。

「も、もしもし」

私は、

自信なさげに
言った。

『友里っ！
早く帰って
来なさい！』

お母さんの
怒鳴り声。
反射的に

「…いやだっ」

『……？！
何言ってるの！』

「あんな家…
帰りたくない」

『だめっ！
言うことが
聞けないの?!?!』

お母さんの
怒鳴り声を
聞いてると
涙が溢れてきた。
それを見た
知哉は
びっくりして

私の涙を
拭い携帯を
取って

「お母さん、
今日友里は
かえせません。
頭を冷やして
ください」

そう言つて
電話を切つた。
私は、涙が
とまらない。
するともう一度
知哉が涙を
ぬぐつて
抱きしめて
くれた。
ギュツ と…。

「…っ！
ともやつ…」

「大丈夫。
俺が側に
いるから…。
心配すんな」

私達はもう一度

抱き合った。
そして段々
知哉の唇が
近づいてきて
キスをした。

「んっ…んっ」

息が漏れると
知哉は私の
服を脱がせた。
そして胸に
キスをする。
ちゅっ。

「あっ…。

あっとも…やっ」

声が出た。
と、同時に
知哉は
エスカレーター
していく。
知哉の手は
私のパンツの
中に入る。

「はあっ…

ふうっ…！

あっ！あっ…」

こんな声を
出すのは
初めてだから
恥ずかしい。

「友里……
大丈夫か？」

そう
言いながら
知哉の手は
動く。

「だい……じょ……
あふっ！はっ……
とも……っや……」

こんな
経験は初めてだ。
っっていうか
六年でエッチは
とても早すぎ
だと思う。
私は、ただ
気持ちよさに
我慢できず
声を出すだけ。

「……はあっ……」

「友里……？
気持ちいか……？」

「あつ……」

あつ………。

きもち……。

はあっ！……

とも……やあ……

止めてっ……。」

これ以上やると

妊娠しそうで

怖かった。

すると徐々に

知哉の手は

止まる。

いつの間にか

汗だくに

なっていた。

「……はあつ。

はあ……っはあ」

私達は

布団の中で

力尽きて

寝てしまった。

―翌朝―

自然に目が
覚めた。
目の前には
知哉の寝顔。
…可愛い。
そう思っ
つい笑っ
てしまっ

「クスッ…」

その声で
知哉は起きて
しまった。

「友里……。
おはよっ」

「おはよう……
シャワー
借りてもいい？」

昨日は
汗だくのまま
寝てしまった
ので体が
ベタベタで
気持ち悪い。

「ああ。
いいよっ。」

「じゃあ、
借りるね」

私は、
洋服を持って
お風呂に
向かった。

「ありが
あれっ？」

ガチャッ

|

|||

|||||

|||||||

いないのっ？」

部屋は

静まりかえり

知哉の姿が

なかった。

とりあえず

私はベッドに

座った。

すると

「友里っ……」

知哉が

帰って来た。

「知哉……」。

どこ行って……」

私が

言い終わらない

内に

「すぐに、

家に来て。
友里の
お父さんが。」

ドキッ。

「お父さんが？」

「ああ。

今すぐ出れるか？」

「うん……」

お父さんが
呼んでるって。
怒られるんだ。
凄く不安に
なってきた。

「大丈夫だ……」

急に知哉の
体が触れた。

「俺がいるから」

知哉は
そう言ってクレタ。

「うん……」

そして
私達は家に
向かった。

ガチャッ

「ただいま……」

私の声と同時に

「友里っ！」

何してるの?!
早く入りなさい」

もお、やだ…。
ふいに知哉の
手が私の手を
またギュッと
握りしめて
くれた。私は
それだけで
安心する。

リビングには
お父さんと
お母さんが
隣同士で
座っている。
私と知哉は
隣同士で
座る。
お父さんと
お母さんと
向かい合う
形になって
しまった。

微妙な空気の中
お父さんが
口を開いた。

「友里……………」。
昨日はどこに
行っていた？」

「知哉の家」

「そっか…。
じゃあ知哉
くんに聞く。
どうして
友里を家へ
連れて行った？」

「友里は……………
泣きながら
俺に、家に
いたくない
って言ってきた
んです。俺
黙って……………
られませんでした」

「そっか…。
友里っ」

お父さんの
鋭い声。

「は、はいっ…」

「いい彼氏さん
をもったな…」

「……えっ？」

お父さんの
言葉が理解
出来なかった。

「知哉くん…」

「はい」

「友里を
よろしく頼む…」

「任せて下さい」

お父さんが
認めてくれた。
私は手で口を
おおって
泣いた。

「友里……」。

ごめんなさいね。

八つ当たり

なんか

しちゃって……」

お母さんは

深く頭を

下げて謝る。

「八つ当たり？」

「そう……」。

お父さんの

会社が潰れる

かもしれない

って聞いてね。

それで最近

喧嘩してたの。

そしたら

段々、友里や

お姉ちゃんに

八つ当たりを

しちゃってね。

本当にごめん」

「いいよっ……」。

もう。

大丈夫だから」

「よしっ！」

知哉くん！！！！！！

今晚はうちで

ご飯を

たべてきなさい」

お父さんは

笑って知哉に

言った。

「いいんですか」

「ああっ！」

「じゃあ、

お言葉に

甘えて……………」

「じゃあ、

今からご飯

作るわねっ」

お母さん

なんかうでまくり

しちゃって。

まるで昔に

戻ったみたい。

お母さんが
ご飯を作ってる
間に私と知哉と
お父さんで
会話をしていた。

「いやあ。

しかし中一で
親を納得
させるとは！
立派な彼氏さん
だなあ！な、
友里っ」

「これでも、
六年の頃は
やんちゃ
だったんだよっ」

「そうなのかあ。
一年であっという間
に変わる
もんだなあっ」

それから
私達は他愛も
ない会話を
した。

|

||

|||

||||

|||||

||||||

|||||||

|||||||

「出来たわよっ」

「うわぁ。

美味しそう！」

お母さんは

いつになく

はりきってる。

「このお肉とか
いい匂い……っ」

その時だった。

匂いをかいだ

瞬間、急に

吐き気が

おそった。

「……っ！

ちよっとトイレ」

私はダッシュで

トイレに

向かった。

「おえっ……。

っはぁっ……っ」

どうして？
急に吐き気
なんか…！

………！
はっ！まさか…
妊娠じゃ
ないよね…？
私の鼓動は
高鳴る。
どうしよっ。
知哉に相談…、
は駄目だよ。
できるわけ
ないじゃん。

「あつ！友里。
美味しいわよっ」

みんなはもう
食べ始めていた。
私は椅子に座り

「い……………」
いただきます」

なるべく
笑顔をつくった。
でも、

いざご飯を
食べると
また吐き気が
してきた。

「ごちそうさま」

頑張っ

て
ご飯を食べたけど
体は限界だ。

「美味しかった
わねえー」

お母さんや

お父さん、

知哉はみんな

満足そうな

顔をしていた。

「じゃあもう

帰ります。

お邪魔しました」

「はいっ

またねっ」

「送ってくよ…

ってか荷物

知哉ん家に

置きっぱなし

だから…」

「そうだったな」

私達は
靴を履いて
外に出る。

二人で並んで
歩くとさつき
の吐き気を
思い出した。
言ったら
知哉：どんな
顔をするかな。
そんな事を
考えてると

「友里、
さつきから
顔色悪いぞ？」

と、知哉が
私の顔を
覗きこんで
言ってきた。

「……………」

私は困ったまま
無言でいた。

「友里………？
何かあったか？」

言えないよ。
でも………

どうすれば……。
私は、必死で
涙を我慢
したけど一粒
流れ落ちると
後から後から
流れる。

「ゆ、友里っ?!
どうしたんだよ」

「知哉………っ
…ひっく………」

「言ってみろっ」

知哉の
真っ直ぐ視線。
余計言えないよ。

「知哉あつ……」

私は知哉に
抱きついた。

「友里……
どうした？」

「私つ……つ
どうしよっ！
私…妊娠……
したかもおっ」

言っちやった。
どんな顔
するかな……。

知哉は私を
抱きしめる
力を弱くした。
そして私の
体を離し
肩を掴み

「本当……
なのか……」

知哉の声は
かすかに

震えていた。

「分かんない…

けどさつき

急に吐き気が

して。ご飯

食べても

吐き気が

するんだ……」

すると

知哉は急に

どこかへ

消えてしまった。

ごめんね…。

知哉。

私は、
十分位
その場で
立ち尽くしてた。
すると
前から知哉が
片手に何かを
握って
走ってきた。

「っはあ！
……はあっ！
友里……、
これっはあ！」

知哉に
渡されたのは
妊娠検査…。
ドクンッ
私は早速
それを使った。

これで
妊娠してたら…

『ピッピッピッ』

ドキッ。

診ると

『妊娠あり』

そう表示

してあった。

「うそっ。」

「マチかよ」

私達は

無言でいること

しか出来なかった。

中編

「どっしょ…しよっ…」

嘘でしょ？

まだ六年だよ？

こんな話…。

「……ンでくれ…」

かすかに

知哉の声が

聞こえた。

「えっ？………」

「産んでくれ…」

知哉から出た

言葉は私の

思考を止めた。

「…知哉？」

私…まだ六年…

なんだよっ？

…絶対…

反対される…」

「それでもいい。

友里に産んで

ほしんだ…」

知哉は

真っ直ぐに

私を見て

言い放った。

「…私だつて

産みたいよ…？

知哉との子供を

さずかれて

嬉しいよ…。

でも…

お母さん

達には何て

言えばいいの？」

私達は

黙りこんで

しまった。

どうすれば…

いいの？

神様……………

教えて下さい。

「おろすしかないのかな…」

それだけが
今、私の頭に
浮かんだ事。

「……………！？
何言ってるんだよ。
命って……
そんな簡単
なのかっ?!」

「私だって…
私だって
分かんないよ！
おろしたく
ない……………。
けど……………
どうすれば

いいの?!」

「産むしか
ねえだろ……」

「産むって…。
そんな簡単な
ことじゃあ
ないよっ
……」

冷たい涙が
溢れ出る。
どうして…。
なんで…。

初めて知哉と
喧嘩した。

「友里……
今日は俺ん家
に泊まれ」

「グすっ。
わかつた……」

私がそう
言うと知哉は
早速私の家に

電話した。

「…はい。」

じゃあ今日は
友里を
泊まらせるんで
はい。……」

「どうだった？」

「オツケー
してくれた…。
じゃあ、
行くぞ…」

私達は
無言のまま
知哉の家へ
着いた。
知哉の家に
いくのは
何回目だろ…。

知哉の
部屋には
朝居た
通りだった。

私は、床に
座った。
知哉はリビング
から持ってきた
ジュースを

机に置いてから
私と同じ様に
床に座った。

無言が続く。

そんな無言を
消したのは
知哉だった。

「俺……………」。
正直友里が
妊娠した時
びっくりした。
どうして
いいか……………
分かんなくて。
でも、命が
出来るって
すごい事だと
思う……………。
そしたら友里に
産んでほしくて。

でも、小六が
子供産むって
あり得ないと
思う。それに
中一が父親に
なることも
あり得ない……
って思った。
それでも……産んで
ほしんだ……
友里………」

知哉……。
そこまで考えて
いたなんて……。
嬉しいよっ。
また、涙が
溢れた。

「知哉……。
私……産むよ……。
知哉との
子供を……
産みたい……」

私は精一杯の
気持ちで知哉に
言った。

そしたら
知哉がギュツと
私を抱きしめて
くれた。
私は泣きながら
抱きしめ
返した。

「ありがとう…。
友里……」

耳元で
聞こえた
知哉の声…。

”産む”なんて
簡単じゃない。
それでも
知哉がいれば
きっと…
奇跡は起きる
そう…
信じるよ…。

チュツ

おでこに

柔らかい

感触が残る。

私は目を

覚ました。

そこには

知哉がいた。

「知哉……っ。

おはよう……」

「おはよう……」

「朝から

チュウなんて

照れるよっ
「

「そおかつ？」

そう言いながら
知哉は私に
近づいて

「ここに……
俺らの子供が
いるんだよな」

知哉は無邪気な
笑顔を向けて
愛しそうに
お腹を撫でた。

「…うんっ」

「暇だねっ。
どこ行く？」

時計の針は
まだ10時20分を
さしていた。

「んー……………」
「そうだなあ……
ゲーセンでも
行くかつ」

「そだねっ」

「そうと

決まって

私達は早速
用意をした。

「準備出来た？」

「バッチリっ」

「じゃあ

行くかつ！！！」

私達は
知哉の家を出て
ゲーセンに
向かった。

家を出るなり

「大丈夫か？
ゆっくり
歩こうなっ
」

そう言ってきた。

「まだ、
気が早いつてっ
」

私が笑うと
知哉もつられて
笑った。

他愛もない

会話をして
ゲーセンの
近くまで来た。
すると目の前に
見たことの
ある姿を発見。

「あつ。
…未夢だつ。
未夢だつ。
未夢だつ」

そう呼ぶと
未夢は私に
気が付いて
近寄って来た。

「おーっ！
友里久しぶり。
何ー！？
彼氏とデート？！」

「まあ……
そういうとこ
かなあ……」

「ヒューっ！
熱いねーっ」

うわっ。

めっっちゃ

冷やかされてる。

「も、もう

行こっ！

知哉あっ……」

「おう……」

「じゃねっ！

友里っ」

「バイバイっ」

私と未夢は

別れて

ゲーセンに

向かった。

「うひゃ〜っ
めっちゃ
混んでるっ！」

知哉は
辺りを見渡して
言った。

「あつ、
プリクラだけ
混んでないよ！
撮ろっ？！」

「んっ。
そうだなっ」

知哉はすんなり
オツケー
してくれた。
すごい嬉しい！
だって…
知哉とプリクラ
なんて今日が
初めてだから！

中に入り
背景を選んだ。
すると

いよいよ
ポーズだっ。

「何のポーズ
とればいいんだ?!
考えてねえっ。」

「私もーっ」

私達は
取り乱した。

「じゃっ、
これでいいや!」

知哉は
そう言いながら
私の顔を
つかんで
キスをした。

「……っ?!」

私は、言葉が
出せなかった。

『カシヤツ』

撮っちゃった！

「上手く

撮れたなっ！」

あの無邪気な
笑顔で言った。

その後から

私達は慣れてきて

計、八枚

撮った。

知哉が抱きつく
やつ

知哉と私が

笑顔で二人、

ピースをするやつ

知哉が変がおを

して私が笑うやつ

どアップのやつ

ふつうに笑顔や

二人で変がお、

そして何より

一番嬉しかった

やつは知哉が

私のお腹に

チュウするやつ

これは一生

忘れないと

思った。

次は落書き。

「落書きって

何書けばいいの」

「書きたい事

書けば

いんだよっ」

「うーんっ……」

知哉は
腕を組んで
悩んでる。
可愛い……。。

「あーっ、
プリクラって
おもしろえなっ」

「でしょー！」

私達は
携帯の裏に
知哉が私の
お腹にチュウ
するプリクラを
貼った。

その後は
UFOキャッチャー
や色々
楽しんだ。

外に出ると
雨が降っていて
その上、とても
寒かった。

「さみーっ」

「まだ、春
なのかなー？」

「春でもこんな
寒くねーだろ。
あーっ！ちよー
さみーっ」

「だねっ。
つてか知哉、
大丈夫？
半袖だよっ？？」

「全然よーっ。」

っつーか何、

俺の心配

してんのっ。

友里こそ

平気かつ？」

「全然っ。

ちよー寒い…」

私は、生地が

薄いカーデイガン

をはおっている。

のにも関わらず

寒い。

「…ちよつと

待ってる。」

そう言っつて

知哉は何処かへ

行っってしまった。

十分すると
知哉が走って
戻ってきた。

「ほらっ。

ちゃんと

温かくしねえと
風邪引くぞ。
お母さんっ」

知哉は私に
マフラーと
生地が厚い
パーカーを
買ってきて
くれた。

「知哉……
ありがとう……」

私達は
再び歩き始める。
お昼は家で
食べる事にした。

知哉が私の手を
握る。

知哉の手は
とても
冷たかった。

「知哉……、
手、冷たいよ。
大丈夫？」

「全然、
平気だしっ」

知哉は
笑って誤魔化した。

「さみーっ」

家に着いて
知哉は自分の
部屋に入るなり

ストーブを
出してつけた。

「うおっ。

あつたけー」

「クスツ。

知哉、

子供みたい」

「あっ！

笑うなよっ」

私は、照れる

知哉が益々

愛しいと

思った。

まだ、寒くて

震えが

止まらない。

そんな私を

見て知哉は

「…っ！

友里ごめん！

寒かったろっ

本当にごめん！」

知哉は私に

ストーブを
向けてくれた。

「ありがとう」

それから
少し無言が
続いたが

「ねえ知哉……」

私は、知哉の
名前を呼ぶ。

「んっ？」

「好きだよ……」

自分でも
何でこんな事を
言ったのか
分からない。

「友里……」

知哉は
私にキスをした。
ベッドに
押し倒される。

「んっ
んっ……」

私は知哉を
離れた。

「……はあっ。
駄目だよ……。
今こんな事、
したら……」

それでも
知哉は
私にキスをする。

「んっ……。
はあっ……」

「友里……」

「んっ……」

「俺……」

そんな声
出されたら
我慢出来なく
なるっ……」

そう言つて
知哉の手が
動く。

「はっ………
駄目……だよっ」

「友里………
愛してる……」

「私も………
私もだよっ。」

知哉の手は
ゆっくりと
途中で
確かめながら
動く。

「知哉………っ。
だめっ。
やめてっ……」

「…俺っ……
止めらんねえよ
友里…っんっ」

知哉が初めて
声を出した。

「ともっ…や…。
だめ…だってっ」

やっと知哉は
止めてくれた。

「ごめんな…。
我慢出来なくて」

知哉は
悲しい顔をして
謝った。

「私も…。
知哉と同じ
気持ち
だったから…」

「ははっ。

友里は

我慢強いなっ」

「へへっ……」

「腹、減つたる。
今持つてくるな」

バタンッ
知哉は部屋を
出た。

部屋は、
静かになった。
ふいにお腹を
撫でる。
ほんとに……
赤ちゃんが
いるんだね。
ちゃんと
産めるかな……。
その前に
お母さん達を

説得しないとね。

ガチャッ

「友里ー、
こんなんで
いいかー??」

そう言つて
知哉は
カレーライスを
持ってきてくれた。

「全然いいよっ」

『じゃあ
いただきます』

カレーを
口に運ぶ。
その時だった。

「…つう…」

急にまた
吐き気がおそそう。

「友里っ?!
大丈夫かっ?」

私は何とか
我慢した。

「…っはあ。
大丈夫…。」

「吐き気か?」

「うん…。」

「大丈夫か?」

知哉は
背中をひたすら
さすってくれた。

「ありがとう。
もう…大丈夫…
だから」

「カレー、
食えるか…?」

「ごめん…っ。
食べれない…」

「わかった。

無理しなくて
いいからな…」

「ありがとう」

私は、ぐったり
と知哉のベッドに
寄り掛かった。

「友里……。」

ベッドで
寝てる…?」

「うん…」

私は、
知哉のベッド
で眠りについた。

私は、夢をみた。
暗闇で一人、
泣いてる自分。
するとそっと
誰かが後ろから
抱きしめて
くれた。

「……………りっ？

……………ゆり？

……………友里？」

名前を呼ばれて
目を開ける。

「とも……………や……………？」

「友里……………」。

何で泣いてんの？」「

「えっ……………」

自分で
目をさわる。
濡れていた。
そっか……………

夢だったんだ。

「……………夢か……………」

「…えっ？夢？」

「うん……………」

夢でね、暗闇で
私が泣いてたら
誰かが後ろから
抱きしめて
くれたんだ。」

「…それ…っ。
俺だなっ！」

知哉は
笑って言った。

「…知哉……………」

「そうっ……………！
俺が友里を
必ず守るっ。
いつでも……………。
どんな時も……………」

「知哉あっ……………」

私は知哉に

抱きついた。

「そいえば、

今日日曜日

だよなつ。

友里何時に

家帰る？」

「そうだ…。

今日家に…。

帰らないと。

「七時に帰る…。」

「……………」。

帰したく

ねえなあつ。」

「…えっ？」

「友里を帰したく
ない……………」

知哉は
うつ向いて
言った。

「知哉っ。
私だっで家に
帰りたくないよ」

「…でも、
もうみんな
仲良くなっだから
大丈夫だなっ」

「うん………」

私の気持ちは
重いまま。
妊娠………。
何て言えば
いいんだろ。

後、
産婦人科にも
行かないと。

「知哉、

病院いつ行く…？」

「……………」。

そうだな。

行かねえとな…」

知哉の返事は

それだけだ。

遠くを見つめて

いる。どうして

か聞きたいけど

聞いちゃ

いけない気がした。

「じゃあ行くか」

時刻は七時。

「うん……」

本当は家に何か
帰りたくない。

私達はずっと
無言でひたすら
歩いた。

「じゃあ、」

また明日なっ」

知哉は

そう言つて
手を振つた。

「うん。」

私は
ドアを開ける。

「あつ！

友里お帰りっ」

「ただいま…」

笑顔で

迎えてくれた

お母さんに

笑顔で返す

ことは

出来なかつた。

ガチャッ

「はあっ……………」

自分の
部屋に入るなり
ため息が出た。

今日はもう寝よ。
私はベッドに
寝転んだ。
するとメールが
きた。

『 ～～ 』

みると……………
私ははね上がった。
だって、
知哉だったから！

開いて見た。

『友里、
体調は大丈夫か？
何かあったら
俺に直ぐ電話
しろよつ。』

そう、
書いてあった。

嬉しいよつ。
知哉ありがとう。

『うん。
大丈夫だよ。
知哉、今日
半袖のまま冷たい
風にあたったから
風邪、
ひかないでね？』

送信つと……………。

すると
直ぐに返事は
返ってきた。

『俺の心配は
すんなつ。』

お前こそ、
風邪ひくなよ、
お母さん。』

『大丈夫っ！
私強いから！』

『そうには
見えねーけど（笑）
じゃっ、
また明日なっ！』

『うん。
バイバイっ』

そこで
メールは
終わった。

私は知哉の
温もりを
感じながら
眠りについた。

—翌朝—

学校へ向かう。

「友里っ！
おはようっ
」

歩いてると
未夢が後ろから
やって来た。

「あっ未夢。
おはよう…。
ってか今日
やけに
ご機嫌だねっ！
何かあった？」

「うふふーっ。
実はね……」

未夢の
不気味な笑顔。

「な、何…？」

私は恐る恐る
聞いてみた。

「実はね……
めでたく
宮元と……
付き合う事に

なりましたあ
「

えっ……………!?

「マヂでっ!?!」

「うんっ!

マヂでーっ
「

「良かったじゃん!
本当に良かった
じゃんっ!?!……………!?!」

「うん……………」。

今でも夢みたい。

あっちから

告白したから……」

……………?!

宮元……あいつ

金曜日に私に

告ったよねっ?!

まあ、いつか。

それから
学校に着くまで
私達は他愛も
ない話しをした。

学校はもう
チャイムが
鳴っていた。

「ヤバッ。
早く行こっ」

未夢は
急いで上履きに
履き替えて
教室へとダッシュ
で走っていった。
私も急いで
教室へと向かった。

いつも通りの教室。

「あつ。」

「来たぜ内藤ー」

私が教室に
入るなり宮元が
私の方を
指差した。

「な、なにっ？」

「お前さあ、
金曜日教室の
全体掃除………
してないだろ？」

宮元に
そう言われて
ハツとした。

「そうだった！
ごめん。神山、
忘れてて……」

私が謝ると

「あー、
俺も忘れたから」

「えっ?!
そうだったの……」

私はホツとした。

「なあ、内藤。
ちつと来て」

宮元は
そう言われて
廊下に出る。

「あんさあ……、
俺、森下と
付き合ってたんだ。
ごめんな……。
俺から告白
しといて………」

宮元は
下を向いている。

「んな事、
いいって！……！
私もさっ……
彼氏できたら……」

自分で
言っというて
すごい照れる。

「彼氏って……
誰っ？」

「あー、
覚えてる？
去年、ここから
卒業した……、
田澤。」

「あーっ！
あいつなんだ」

「ちよつとお、
先輩にむかって
あいつっ！？」

「ごめんごめん。
でも……
かっこいい……
よなっ。一応

「憧れだしっ」

「そう言いながら
空をみる。」

「そうなんだ」

「そう言って
私達は教室へ
戻った。」

「あー、
やっと戻ってきた」

「お待ちかねの
ように宮元に
すがりつく。」

「ってか、
お前らイチャイチャ
しすぎだよっ。
良かったー。
内藤も彼氏が
いなくてー」

「神山は
胸を撫で下ろした。
ってかそうじゃ
なくて！」

私、彼氏いるから！

「ごめん。

私も彼氏

出来たんだあ」

私は神山に

微笑んだ。

「……っ???!

うわぁっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

マチ最悪っ」

『アハハハっ』

絶望する神山に

私、未夢、宮元

は笑い合った。

――

――

――

学校が
終わった。
早く終わった
ように思えた。

「ねえっ！
遊大^{ゆっだ}！
帰り、マツク
行こうっ！」

未夢は
宮元にそんな

話をしていた。

「えーっ。

まだ六年なのに

帰りにマツク?!

財布はっ?!」

私は

目を丸くして

二人に聞いた。

「俺が、持ってる」

「えーっ!

宮元あんたっ……」

私は絶句した。

「じゃあ未夢、

うちら行くねっ

バイバイ」

「ば、ババ、

バイバイ……」

私は校門に
向かった。

校門の近くまで
来ると誰かが
私に軽く手を
振っている。

私は、
走って校門に
行くと

「知哉っ
……………」

「ふっ」

そう、

知哉だった。
こんなささいな
喜びが私は
カップルなんだ
と、改めて
実感する。

「来てくれたんだ。
ありがとう……」

「当たり前だろ。
さっ、行くか」

「うんっ……！」

校門を出て
歩き始める。

「そっいえば
体調はどうよっ」

確かめるように
知哉は聞いた。

「うん。
全然平気……！」

「そっか……」

「……ゲホっ……
ゲホっゲホっ……」

「知哉?!」

大丈夫……?」

知哉が

咳き込む何て……」

「平気だよ……」

「……っゲホっ」

平気かなー……」。
心配だよ。

「ねー、」

知哉ん家……」

行きたい」

「おっ?」

おっっ……」

「お邪魔します」

そうやって
知哉の部屋に
向かう。

「なあ、
何で俺んちに
来たがったの？」

知哉と私は
部屋に入る。

「んっ……。
ちよっとね……」

私は悪戯な
笑顔で答えた。

「あー、

何か体が
だりいー」

「大丈夫？」

「おうっ。

水とつてく……」

知哉がそう

言いかけた時

知哉が倒れた。

「っ!???

知哉っ???!

大丈夫っ???!」

私は知哉を

起こそうとした。

「大…丈夫……

だから……」

そう言つて
知哉は笑う。
ふいにおでこを
触った。

「…熱いつ。
知哉、熱ある」

「マジかよっ…」

「知哉…っ。
ベッドに寝てっ」

「友里っ……。
その引き出し
から体温計……
とつて……」

私は、知哉が
指差した
引き出しから
体温計を
とつて知哉に
渡した。

しばらく
部屋は静かに
なつて

『ムムム』

「友里っ…。
何度かみてっ。
ゲホっ……」

知哉の
熱は………

「うそっ…。」

「何度だった…」

「39度2分…」

「マジッ…」

私はとりあえず
体温計を元の
位置に戻した。

「ゲホっ……。」

…ゲホっ！

ゲホっゲホ…」

「知哉……。」

死なないでっ」

私は抱きついた。

「バーカっ。」

死なねえよ…」

そう言って

知哉はキスをした。

「…んっ。」

知哉の体は

とても熱い。

「友里……。」

知哉が私を

離そうとした。

「やつ……………」
離さないで……………」

反射的に言葉が
出た。

「友里……………」
そんな事
言われたら俺…
止まなくなる」

知哉はそう言つて
もう一度キスを
した。

「んっ…んっ……………」

知哉の
手が動く。

「とも…やつ。
駄目……………」

知哉を必死で
止めようと
しても

きかない。
逆にエスカレーター
していく。

「知哉っ…はあっ。
だ…め…あっ。」

「友里にそんな
声出されたら
我慢出来ねえ…」

「だっ…てっ…
とも…や…が
…あっ…
そんな事…
する…からあ…」

「止めて
ほしいかっ？」

「うっ…んっ」

「じゃあ、
友里から俺に
キスしたら
止めてやるっ…」

「知哉の
いじわるう…」

私はそう言っ
て知哉にキス
をした。

そして、
知哉の手が
止まった。

「もお知哉、
病人には思えない」

私は口を
とがらせた。

「ハハツ。
こんだけじゃ
俺の中では
病人じゃ
ねえよっ…ゲホっ
ゲホっゲホっ…」

「ほらあっ、
無理して
起き上がるから」

知哉は
決して弱音を
はかない。
それが知哉だ。

「全然余裕ーっ」

ほらっ、
また強がって。
すっごい……
苦しそうだよ。

「じゃあ……
私帰るねっ……」

荷物を持って
出ようとした。

「……っゲホ。
送ってくから」

ベッドから
起き上がって
知哉は私の

荷物を持った。

「だ、駄目だよっ」

荷物を奪い

返そうとしたが

「いいよっ。

それに：ゲホッ

友里を一人で

夜のなか

歩かせたくない」

もお、人の心配

より自分の

心配しなよっ。

やっぱり
夜は寒い。

「知哉、
寒くないっ？」

そう言つて
横を向くと

「っゲホ、ゲホ。
大丈夫だよ。
友里は平気か？」

「うんっ平気」

本当は寒いけど
ここで知哉に
心配かけられない。

「ありがとう」

「おうつ。
じゃっまたな！」

知哉は

大きく手を振り
私は知哉が
見えなく
なるまで
見送った。

ガチャ

「ただいまあ」

「あー、
おかえりっ」

リビングには
みんな揃ってる。
机の上には
私のご飯が
置いてあった。

早速椅子に
座って食べ
始める。

「いただきます」

と、一言言った。

食べていると

「友里、
今度からは
もう少し早く
帰って来なね。
お父さん、
心配でうるさい
んだからっ」

お母さんは
笑いながら
お父さんに
目をやる。

「う、うるさいっ。
心配なんて
していないっ。」

お父さんは
読んでた新聞で
顔を隠した。

「またまたあ、
」 友里、
大丈夫かっ？
とかあ
” まだ帰って
こないのかっ”
とかご飯の時

時計ばかり
見てるのよ」

声を出して

お母さんと

お姉ちゃんは

大笑いをしている。

照れくさいけど

何だか嬉しい。

「うん。

わかったっ」

そう言つと

「だつてえ、

お父さんっ

良かったわねえ」

「うるさいっ。

どうでもいい」

ますます

お父さんは

新聞で深く

顔を隠した。

ご飯も

食べ終わり

部屋に入ると

丁度電話がきた。

「あつ未夢だ」

一言呟いて

電話に出る。

「もしもおし」

『あつ友里！

聞いて聞いて！』

興奮した

声の未夢。

「どうしたの？」

『今日ねっ、

遊大ん家で

初めて……………

経験したのっ!』

「そうなんだ」

『……………。』

あれっ? ちよー

冷静じゃん』

「…あつ。いや……」

『……さては

田澤ともう経験

したでしょ?!』

「……………う、うん」

『なんだあ。

びつくりすると

思ったのにい』

「ごめん」

『まあ、別に

いんだけどお。

そんでねっ!

遊大がすごい

優しいのっ!』

「遊大が？
優しいの??？」

『そうっ！』

経験する時ね

”大丈夫だよ。

怖くないから。”

って……

言ってくれたの！

もおすごい

優しいの！』

「そうなんだ。

良かったね。

優しい彼氏で！」

『うんっ！』

そういえば

友里は田澤に

何か言われたり

したっ？』

「わ、私っ!？」

『うん』

「私は……」

強引にやられた。」

『えっ……!!』

そりゃ、
怖いでしょっ
』

「うん。始めは
怖かったけど
気持ちよく
なっちゃってさ
もう怖いとか
関係ない
みたいなあ…」

『マヂでー！
やるうっ！
…あっ！つてか
もう切んなきゃ。
じゃあまた
明日ねっ
』

「うんっ
」

そうして
私と未夢は
電話を切った。

部屋は静寂だ。
ふいにお腹を
撫でながら
呟いた。

「ごめんね。
ママ、君の事……
産めないかも
しれないんだ……。
でも……
ママ……
頑張るからね……」

これが私の
精一杯。
産めるとか
産めないとか
今は関係ない。
とにかく
頑張ろう。
知哉と……。

あー……………

眠いよー。

そんな気持ちとは

逆に天気は

とてもハキハキ

している。

「よっ。内藤」

突然、私の

後ろで声が

した。

「……………っ!？」

大輝

そう同じクラスの

石館

大輝。

「…んだよ。

びっくりして」

「いやっ。

だって……..
普段こうやって
話しかけて
こないから。」

大輝とは
それといった
中でもない。

「まあなつ。
最近さ……..
お前元気
ないから……。
どうしたの
かなあつて
思ってたさ」

えっ？
私元気ないかな？

「そお？」

「ああ。
絶対元気ない。
なんつうか……
”何か”に
悩んでる感じ」

私はその
大輝の言葉を

聞いたとき
その”何か”
が分かった。
私……
妊娠のことで
悩んでる。

「大輝は
鋭いなあ……」

「だろっ！
……んでっ。
どうした？」

大輝の声
が急に変わった。

「……」

つい黙ってしまっ
つてかこんな
話……誰にも
言えない。
でも知哉とじゃ
抱えきれない。
かといって
言うわけにも
いかない。

色んな思いが
渦をまいてる。

「まあ無理に、
とは言わないけど。
ほらっ。抱え
きれなくなったら
いつでもかけて
いいからなっ。
じゃっ!!!!!!」

大輝は私に
ケー番とメモが
書いてある紙を
渡して走って
学校に向かった。

私は啞然として
その場で
立ち尽くす。
道行く通行人は
私をチラチラと
見ていたのが
分かった。

「ちよつと
友里ーっっっ」

立ち尽くしてると
後ろから未夢の
声がして、
振り返る。

「…み、未夢…」

「見たよおつ。
石館と仲が
いいじゃんっ」

そう言いながら
未夢は私の肩を
指で突つついた。

「…えっ。
だつてえ……………
急に話し掛けて
きたんだよっ？
そんな仲じゃ
ないのに…。
しかもケー番と
メアド自分から
教えたし…」

「まぢでーっ？
それ田澤に
言うのっ???」

そっか…。

知哉に………

言った方が

いいのかな…。

「どうすれば

いいかなっ………」

「言った方が

いいんじゃない？

石館が友里の事

好きだったら

ヤバイしっ。

それに………」

未夢の言葉が

途中でつまった。

「それに………？」

沈黙が続いた。

「それに………」

あいつだと

何やらかすか

「分かんないし……」

えっ？

大輝が………？

何かするの？

「何するの……？」

未夢は困った
顔をしながら
話を続けた。

「石館つてさ、
外見は爽やかで
優しくて女子から
人気あるけど……
裏では………。
小六のくせに
中一の女と
夜遊び廻ったり
その女と
やっただっていう
噂もあるから……
友里、あんた
気をつけな……」

.....。
知らなかった。
でも.....。

「でもっ、
噂...だよね?!」

「まあね。
信じるかは
友里にまかせる
けどお。まあ
ウチ的には
田澤にちゃんと
相談した方が
いいと思うけど」
「そうだねっ。」

「ってか、
遅刻するよお!
早く行こっ」

私達はダツシユで
学校に向かった。

『ガラガラっ……っ』

教室はもう

先生が来ていて

話し始めている。

私と未夢は

静かにドアを

開ける。みんなが

一斉に私達の

方を見るが

静かにするように

ジエスチャーした。

しゃがみながら

席に向かう。

「おせーよ。

ばーか……っ……」

隣の神山は
小声で言った。

私達が席に
着くと

「あれっ？

内藤さんと……

森下さん、

あなたたち

居なかった……

わよねっ??？」

やばっ。

気付かれた

そう思ってる

と神山と宮元が

フオロー

してくれた。

「先生、

内藤たち朝から

床に落ちた

ボールペンを

探してたんです」

と神山。

それに対して

先生は

「だって……
朝見たとき
いなかった
わよっ？」

うっ……………。
今度こそだめだ。
と思つてると
今度は宮元だ。

「あー、
内藤たち朝
委員会の仕事が
あつて
いなかったんです
ちようど先生と
入れ違いだと
思います。」

「じゃあどうして
内藤さんたち
本人がその事を
言わないの？」

先生……………
鋭すぎる。

「…き、今日、
風邪気味で

あまり声を
出したく
ないんです……」

咄嗟に思い出した
言い訳。

「じゃあ森下
さんはっ？」

「わ、私は
言っても
信じてくれないと
思ったので……」

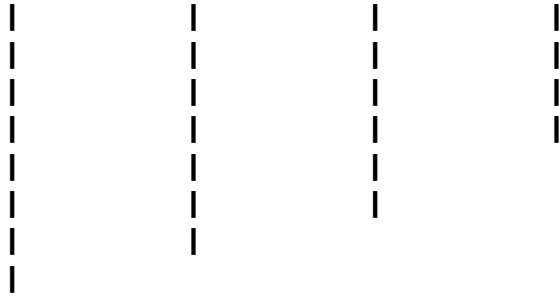
未夢……………。

「そうなの。
なら良かった」

先生はそう言って
話を続けた。

「アブねえ……」

神山何かは
汗をかいている。



「あーっ。
色々あったけど
やっと……..
帰れるうっ」

未夢は大きく
伸びをした。
私は大輝の事が
頭から離れない。
それに校門で
知哉が待ってる
と思うと
どんな顔を
していいか
分からない。

「じゃねー友里。
先帰るね」

未夢はそう言って
宮元と帰った。

一人で校門へ
向かう。

「…つてか昨日
知哉熱あつたから
学校休んだよね。
そうだよっ。
心のどこかで
喜んでる自分が
いる。」

校門の前に
着くと私は
言葉を失った。

「よおっ…ゲホ…
ゲホっゲホ…」

「知哉…」

知哉がいたから。
急にまた大輝を

思い出した。
と同時に私は
黙ってしまう。

「行くぞ……」

「うん」

私は曖昧に
返事を返すしか
なかった。

二人で歩いてる時
黙ってしまう。
そんな私の気持ちに
気付いて知哉は

「どうした？
元気ねえぞ」

「えっ……。
あっいや……」

私は言葉に詰まる。

「ったく。

分かりやすいな。

帰りにうちで

話すか……………」

知哉に

そう言われた。

どうしよう…。

こんな話、

どうやって

話せばいいの。

どうした？」

知哉の部屋は
静かになる。
どうしよう。
言えないよ。
そんな気持ちで
涙が流れる。

「おい。

友里泣くなって…」

知哉は
そう言いながら
私を抱きしめる。

すごく泣いた後
私は知哉に
大輝の事を
全て話した。
外見はいいけど
裏じゃヤバい事。
メアドとケー番を
教えてもらった事。

全て話した。

「友里、

そいつにぜってえ
関わるなよ。

何かあったら
俺に直ぐ電話
しろよっ」

知哉は真っ直ぐに
私を見つめて
そう言い放った。

「うん……………」

何か嫌な予感。
そう思った時

「友里

もう七時に
なるぞ？」

知哉の声が
聞こえた。

「えっ。

あ……うん……」

私は曖昧に答えて
荷物を持ち
知哉て家を出た。

「なあ友里……」

夜の道を知哉と
歩いてると
ふいに知哉が
私の名前を呼んだ。

「何……………」

「俺らの子、
ぜってえに
産もうな……………」

意外な言葉に
私の足が止まる。
そへに気付いた
知哉は

「友里っ？」

私に歩み寄る。

「……………えだよ……………」

私は自分でも
聞こえるか
聞こえないかの
声で呟いた。
でも知哉は
聞き逃さなかった。

「えっ……………」

「当たり前だよ。
知哉との子
絶対に産むよ……………」

産めるよね……？」

声が震える。

「大丈夫だ。

俺がいるから……」

知哉は私が

窒息しそうな程

強く抱きしめた。

「うんっ……。」

そうだねっ……」

「おおしっ！

じゃあ今から

友里の両親に

言いに行くかつ」

えっ？

いまあつ？！

「ちよ、

ちよつと待つて。

まだ心の準備が

できてないよっ」

それに………

絶対反対されるに
決まってるじゃん。

ギョッ

知哉の手が
私の手を強く
握っていた。
知哉の顔を見ると
私の顔を見て
笑っていた。
その笑顔は
ただの笑顔じゃ
なく、何かを
決意したような
笑顔だった。

「っ、着いたね……」

「おう……………」

私達は家の前で
止まっていた。

「はいるかつ」

そう言つて

知哉はインターホンを
押した。

『ピンポーン』

ガチャッ

「あつ、

友里お帰…り…
つて知哉くんっ」

「た、ただいま…。

今日はねお父さん
とお母さんに

話があつて知哉も
一緒なの…」

「そう。

話して？！」

お母さんは
興奮している。

「ま、まあ」

私は曖昧に答えて
知哉とリビングに
向かった。

「お父さん、
友里と知哉くんが
話があるって。」

「話し？」

何の話しだ？」

お父さんは
そう言つて
新聞紙を床に
置いた。

「まあ、
座って………?」

「あ、ああ」

お父さんと
お母さんは
椅子に座る。
私と知哉も
椅子に座った。

「で、話して
何だっ?」

お父さんは
私と知哉を
交互に見つめて
言った。

「お父さん、
お母さん………」

知哉はゆっくり

そしてはつきり
言葉を出す。

「友里のお腹には
赤ん坊が……
いるんですっ」

言っちゃった。

「……………っ?!」

お母さんは
両手で口を
おおっている。
お父さんは
静かな声で
でも驚きを
隠せずに

「本当……………
なのかっ?
友里……………」

私は静かに
頷いた。

「ちよつと
友里っあんた……
まだ六年よっ!??」

わかつてるの?!」

お母さんの

怒鳴り声。

「わかつてる…。
でも産みたいの」

「何言ってるんだ！
許さんっ」

「お母さん
お父さん、
俺…友里を
幸せにします！
絶対です…!!」

「知哉くん。
確かに君は
しっかりしてて
頼れる。けどな
中一が父親何て
無理だ。
ましてや小六が
子供を産むのも」

「お願いします…!!」

「駄目だ駄目だ！
絶対に認めない！」

「俺……………」
諦めませんか。
お邪魔しました」

知哉は
椅子から
立ち上がる。
私は知哉を玄関まで
送るため
知哉の後に
着いていく。

「じゃあ…
行くな……………」

知哉は悲しい
顔をして
外へでる。

「あつ……………。
知哉っ……………」

私は勝手に
言葉を出した。
何を話す訳でも
ないのに。

「んっ？」

「あ、あのさ……
何かぁ………
ごめんね………」

「なあに
謝ってんだよ。」

「だって……
知哉ばかり
責められて………」

「全然平気
だっつーのっ。
じゃあな………！」

知哉は
そう言っ
て知哉は
出ていっ
た。
それと同時
に

「友里っ。まだ

話は終わって
ないわよっ。」

とリビングから
顔を出して
お母さんが言った。

「いいよっ。
もう認めて
くれないなら
勝手に病院行って
勝手に産むから」

と私は反抗的な
態度をとって
二階にある自分の
部屋へ戻る。

「ちよつと！
友里つつつ！！！」

遠くでお母さんの
声が聞こえたが

無視して自分の
部屋に入った。

「ハアっ」

早速ため息が
出てしまった。

「知哉………
会いたいよう………」

そう呟いた。
すると

『~~~~~』

着信音が鳴った。
開くと

「と、知哉っ?!」

そう知哉だった。

「もしもしっ」

『あー、友里？』

「知哉、
どうしたの？」

『俺らさあ……
今から、駆け落ち、
しねえ……？』

はっ？

「いやっ。
ちよつと……。
無理でしょっ」

『いやっ。
平気だつてっ！
手紙を机の上に
置いて出ていく……
つてすれば！
なっ？………』

「んっ。わかった」

『じゃあ、
友里ん家の前で
待ってるから。
じゃあなっ!』

プツッ

「よしっ!」

私は早速
用意をした。

— 30分後 —

「出来たあ…!」

次は手紙かあ。
小さい紙切れに
”お母さんお父さん

しばらく戻りませんが心配しないでください。学校はちゃんと通います”

と書いてリビングに向かう。

ガチャっ

私がドアを開けると同時にお母さんとお父さんが私の方を振り向く。

「友里……っ！
あんたっ……っ」

お母さんは絶句して

「……………」

お父さんは
啞然としている。
無理もない。
だって片手に
重いランドセルと
もう片方に
おつつっきな
バッグを
持つてるから。
私は黙って
机に紙を置いて
はやあるきで
外に出た。

「お待たせ。
知哉っ」

知哉はもう
待っていた。

「うおっ！
友里その荷物！
貸して全部
持つからっ！」

知哉は私の手から

荷物を全て
奪った。

「ちゃんと知哉！
それ重いよっ！？」

「俺を誰だと
思ってたんだよっ
こんくらい
余裕よっ」

知哉は
重い荷物を
軽々にヒョイツ
と持ち上げる。

「そ、そう……」

「それに……
赤ん坊に
もしものことが
あつたら
ヤバいからなっ」

「知哉………」

気が早いよっ。

「さっ！

行くかつ」

「あっ。

どこに駆け落ち
するのっっ？」

「決まってるじゃん
俺の家だよ」

「えっ！

知哉の家だと
お母さん達から
電話来ない？」

「あー、

電話番号

知らないから」

「そっか！」

「何か、駆け落ち
って感じしない！」

「まあなっ
」

知哉は
床に座って
雑誌を読んでる。
私はなんだか
眠くなってきた。
ちよつと寝巻き
だし寝よう。

「知哉私
もう寝るねっ
」

「まぢ？
じゃあ俺も寝る
」

そう言って
知哉は私の
隣に入ってきた。

そして部屋は
静かになった。
なんか……
ドキドキ
してきた。

モゾモゾ

さっきまで
向こうを向いてた
知哉が私の方を
向いて寝てる。
か、かわいい！
ジーンと
見つめてると

「何見てんの」

チュツ

知哉は私の
おでこにキスをした。

「ちよつ、
起きてたの?!」

「友里が
寝るまで
寝るかよっ」

「もー、
いじわるっ」

私は軽く
知哉を叩いた。
すると

ギョツと知哉は
抱きしめた。

「……っ!？」

「友里……
愛してる」

知哉?
どうしたの?

「…私もだよ」

「どんくらい
愛してんの?」

「……んー
けんくらい!?!?!」

私は知哉を
ギョツと
抱きしめた返す。

「友里……………」

知哉の唇は
私の体のあちこち
に触れる。

「あつ……………」

その都度に
漏れる声。

「知哉……………」

「友里……………」

知哉は
エスカレーター
していく。
今、こんな事
しちやいけない
と思ってるのに
気持ちいから……………。

「あつ知哉……………」

あつ……………」

「友里……………はあ……………」

「…友里……………」
「何で泣いてんの？」

「気付けば
私は泣いていた。」

「幸せすぎて…」

「泣き虫っ」

「う、うるさい」

「友里……………」

「知哉は
最後に私に
キスをした。」

「んっ……………」

朝、太陽の光で
目が覚めた。

「友里、おはよう」

横から声がして
向くと知哉が
眠そうにしていた。

「おはよう……
つてか学校……」

「今日、
土曜日だぞ」

知哉の部屋の
カレンダーを
見ると土曜日
だった。

「本当だっ」

「ゲホっゲホ……
……ゲホゲホっ」

「知哉つ。」

大丈夫……？」

まだ咳

してたんだ。

「熱……」

測ってみよっ？」

私はそう言って

引き出しから

取り出した体温計を

知哉に渡した。

熱を測る間

私は心配で

たまらなかつた。

だって……

すごい苦しそう

で呼吸するので

精一杯そうだから。

『ピュピュピュッ』

体温計が鳴った。

「38度8分……」

知哉が静かに
そう言った。

「ハア……
……ハアハアっ」

かすかに
知哉が苦しそうに
呼吸するのが
分かった。

「知哉……。
苦しいっ？」

知哉の大きな
背中を擦りながら
聞いた。

「全然……
……余裕だよ……」

知哉……。
嘘だって……
分かるんだよ？
正直に言ってよ。

「ごめんな…友里。
今日どこも
行けねーよ……」

「いいよつ。
知哉の側に
いれるだけで
いいからっ。」

「友里は
優しいなあ……。
……ゲホゲホっ」

私は知哉が
咳をするたびに
背中を擦る。
知哉、昨日
学校行ったんだ。
熱、すごい
あるってわかって。
私には分かるよ。
私を迎えに
行くために熱が
あっても学校に
行ったんでしょ？
ありがとう……。

「ゆり……………」
「なんで泣いてんの」

知哉はそう
言いながら私の
涙をぬぐう。

「知哉あつ……………」
「死なないでよっ」

みつともないな。
泣きながら知哉に
抱きつくなんて。
でも、六年生の
私にはまだ
どうすればいいか
分からない。

「死なねーよ……………」

力なく
抱きしめ返した
知哉。

『 』

あつ電話だ。

私は知哉から
離れて電話を
取りにいった。

ケータイ画面には
”非通知”と
書いてあった。
出ると

『もしもし。』

俺、大輝……………」

だ、大輝?!

「何で私の
ケー番知ってるの?」

『あー、』

ささた
笹田に
教えてもらった』

美李につ?!

ちよつと美李ー

余計な事

しないでよお。

「そ、そうなんだ。
でどうしたの？」

『あつ、そうそう
内藤さあ……
今から会える？』

「いやあ……
今、彼氏ん家
なんだ……」

『そうっ……。
分かった。
じゃあなっ』

ツーツーツー
電話は一方的に
切れた。それに
いつもの大輝じゃ
ないし最後、
何か怒ってた。

「……ッゲホゲホ！
ゆり……誰……
だった？ゲホっ」

後ろから知哉の

声がした。

「あっ……………」。

いや……………」

「何でもないよっ」

私は笑って

誤魔化した。

大輝からって

言うと知哉は

心配するから……。

今、知哉に

心配かけたくない。

「友里……………」

知哉に名前を

呼ばれた。

「な、何？」

「あいつからだろ？」

私は思わず

後ろを振り向いて

しまった。

「何で……………」

分かるの……………」

「友里の事なら
何でも分かる
っつーの！」

知哉は
微笑んだ。

「うん……。
でも心配
しないでね？」

「ばーかつ。
俺に気い使って
んだろっ？」

「……………」

私は黙り
こんでしまった。

「友里を
守れなきゃ彼氏
失格だからなっ」

知哉はそう言っ
て笑った。

「とっ
知哉ぁ……………」

私はまた
知哉に泣きながら
抱きついた。

「……たく、
友里は泣き虫だな」

「ほらっ
……
落ち着いたか？」

「うんっ」

一時間ぐらい
泣いちゃった。

「知哉……」

「んっ？」

「もしも私が、」

他の人を好きになつたら
どうするっ?」

私は意地悪な
笑みを浮かべて
聞いた。
すると知哉は

「そいつを
ぶっころすっ!」

知哉は
笑いながら言った。

「何それえ言いすぎ
でしょ〜…っ」

私がそう言った
瞬間お腹に急に
激痛がはしった。

「い、痛いっ……」

私はお腹を
おさえる。

「友里っ!?
大丈夫かっ?!」

知哉はベッドから
跳ね起き
私に近づいた。

「知哉っ…。」

痛い………！

痛いよっ…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4582h/>

卒業

2010年10月9日01時59分発行